⑧

◆小 論 文〈B 類音楽学分野〉〔前期日程〕(90分)　東京芸大'04

次の文章は，指揮者の小澤征爾氏と作曲家の故・武満徹氏の対談のなかの一節である。両氏の意見を踏まえた上で，音楽家と国家についてのあなた自身の意見を述べよ（字数制限なし。1枚で書ききれないときは2枚目を用いること)。

小澤　国家と芸術，文部省と音楽の関係についての僕の持論はね，偉ぶって聞こえると嫌なんだけど，明治以来の音楽教育に象徴的に現われていると思うのね。日本に西洋音楽を導入しようとして，昔，文部省のお役人が小学唱歌というのを決めたでしょう。

武満　文部省選定のね。

小澤　西欧音楽は日本の音楽とちがって五線譜に表わされるから容易に普及することが可能なんだよね。だから音楽教育はそれなりに成果を上げてきたよね。生まれつき音楽の嫌いな子を除いて，そこで新しい音楽に触れて，新しい喜びを発見した子がいると思うよ。

武満　そう，日本が鎖国を解いて，西洋文明から貴重な衝撃を受けて，国をあげて政治的に，追いつき追い越せという形で西欧の学問や芸術，文化を学んだわけでしょう。富国強兵政策と通ずる国策としての音楽教育が行なわれたわけだ。

小澤　僕はそこに大きな問題がひそんでいたと思っているんだ。つまり音楽は御上(おかみ)から与えられたものだったんだよ。音楽家になろうと思った瞬間から国家とは無縁だと思うべきなのに，なぜかそこに国家の力や政治が強く作用しているわけだ。ヨーロッパの場合も教会のボスとか宮廷の王様とかの関係まで逆のぼることができるけれども，日本の場合は，御上の音楽という色彩が強いよね。

国・公立大学

だから自然に，音楽家が成功すると，文部省や国家や官僚と結びつきたくなってくるんじゃないだろうか。文部省や文化庁の悪口を言うつもりはないけれども，意識のあり方として文部省や文化庁は音楽家にとって有益な存在じゃないね。

武満　全く有益じゃないよ。ただね，音楽家として成功すると国家や体制と結びつきたくなるのではなくて，音楽家として成功してある社会的な地位を占めたあとで，創造力や音楽性が衰弱してくると，体制の力を借りなければならなくなるんじゃないかな。

小澤　僕は，その背景として小学唱歌があるという意見なんだよ。

武満　本当に出来る音楽家は死ぬまで棒を振ったり作曲したりするけれども，それができなくなったときに，国家や政治に期待する余地が現われてくる。そして音楽は御上からもらったものという意識がふたたび現われてくる。

（小澤征爾・武満徹著『音楽』1981年発行より）